

趣味を極めて 自由に生きる!

ただし、
神々は愛し子に
異世界改革を
お望みです



紫南 Shinan

Illustration 星らすく

クロ

偉大なドラゴンの
一体。ツンデレ気質
の真面目な長男。



アカ

偉大なドラゴンの
一体。頑固な兄を
手玉にする長女。

ジュエル

大陸を創り出したという
三体のドラゴンの末っ子。
宝石大好き。



フィルズ

公爵家第二夫人の子で、
モノ作りが大好きな少年。
優しいながらもやや毒舌。
セイスフィア商会を運営中。

ラウンド

気のいいベテラン冒険
者。フィルズの昇級試
験を担当する。



カリュエル

カルヴィア国第二王子。
聡明で社交的。



リサーナ

カルヴィア国第一王女。
自立心旺盛で気が強い。



セルジュ

フィルズの異母兄。
公爵家の跡取り。



ユゼリア

カルヴィア国第一王子。
フィルズの元で更生中。



主な登場人物 Main Characters

ミッション① 更なる躍進のための準備をしよう

それは長く微睡みの中にあつた。もう自身の体は、世界のひとつとして還つたのではないかと錯覚するほどだ。

そんな中で、最近は楽しみを感じていた。それが同胞から伝わってくる感情であると気付いたのはつい最近。そうして、ゆっくりと覚醒していった。創世の頃からどれだけの月日が流れただろうかと考えることさえある。

しかし、思い出すのは、冷たい記憶。拒絶されることの悲しさ、愛した者達から避けられるのはとても心が痛かった。だから、眠りについた。だというのに先日、同胞から言葉と共に苛立ちの感情を受け取った。

《約束を果たす時が来る》

それを聞いて思い出した。恐らく、もう一体の眠っているはずの同胞も同じだろう。かつて、賢者と呼ばれていた友人の言葉だ。

『あのさ。いつか。いつか、もしかしたら、俺ら賢者の生まれ変わりだって言って……賢者の意志

だなんだって言いながらバカやる奴が出て来たらさあ、バカやってんじゃねえって叱ってやってくれね？』

《そやつらは、バカをやるのか》

『やりそうなんだよな。俺らも神も言わねえからいけねえんだけど、俺らつてさあ、この世界で生まれ変わらねえんだよ』

《っ、そうなのか……》

『うん。死んだら、元の世界に帰る。だからさ、俺の生まれ変わりは現れねえから……待つんじゃねえぞ』

《っ、誰が待つものかつ》

大きな声を出して否定したのは、期待した部分が確かにあったからだ。それを素直に認められる性格ではなかった。あの時、素直に寂しいと口にしていたら、友人はどう答えただろうか。その後悔が長く胸を締め付けていた。けれど、それを伝えたら、あの笑い声が聞こえなかったかもしれない。

『あははっ。だから頼むよ。俺らの存在を使つて、バカやる奴は成敗せいばいしてくれや』

《ふんっ。気が向いたらな……》

『おう。せめて、覚えておいてくれよなっ。約束だ！』

もう顔は思い出せない。記憶することができずなのに、大事なその記憶は霞かすみんできている。けれど、言葉は忘れていない。その声も。

ゆっくりと暗闇で目を開け、今一度目を閉じた。すると、内に向かつて声が届く。懐かしい同胞の声だった。

《ク口、起きた？》

《……アカか……お前も起きたのか》

《当然よ。約束が果たされるのでしょうか？》

《ああ……本当にそんなバカが現れるとはな……》

《シロから得た情報だと、どうもかなり前からいたみたいだけど》

《ふんっ。ここまで来られないような奴らが悪い》

《賢者でもなければ、ここまでは来られないわよ》

ク口と呼ばれた方も、アカと呼んだ方も、眠りについてた場所は、人類が発見できていない陸の孤島、その奥深くだ。

《アイツは来たぞ》

《転移魔法が暴走して、たまたまでしょう？》

《それでも来たことには変わらない》

《あなたつて、彼のこと本当にお気に入りだったわよね》

《っ、気に入ってなどおらん！》

《相変わらず素直じゃないわねえ。そんなだから、一緒に行こうって言ってもらえなかったのよ》

《うっ、うるさい！》

ちょっと気にしていたところだ。もつと素直になっていれば良かったと、一緒にいたいと言えれば良かったと何度もあの頃後悔していた。全部の感情が同胞に伝わるわけではないので、それはバていないはずだったのだが、お互い性格をよく理解しているため、察せられていた。

《はいはい。さてと、私はもう生まれ変わりの準備に入るわ。あなたは どうする?》

《そのまま行かないのか》

《まだ相手の居場所も分かかっていないみたいだし、体が大きいと動きにくいわ。それに、小さくなった方が、可愛がってくれそうじゃない?》

《か、可愛がって!?》

《そうよ。ほら、シロから伝わってきているでしょう? 随分と楽しんでるみたいだわ。私たちが体が小さくなったところで、それなりの力を出せるもの。人相手なら十分よ。滅ぼすわけじゃないんだし》

《当たり前だ! 物騒ぶつそうな!》

人という種は同族であっても欲のために誰かを追い詰める。賢者が受けた仕打ちを知っているクロはそれに苛立ちを感じるが、自分達は神に遣わされた者でもあるため、懲らしめてやりたいとは思っても、人を滅ぼそうとまでは不思議と思えないのだ。何より、クロは真面目だった。

《まあ、そういうことだから、生まれ変わったら会いましょう》

《……分かった》

《楽しみね。シロが早く起きろ、早く来いって、楽しそうだわ》

《ああ……》

《じゃあ、またね》

《ああ……》

少し前に爆発しそうな苛立ちを感じていたのに、今はもう、楽しいという感情しか伝わってこない。本当は、同胞の目を通して視ることもできるのだが、なぜかシロはそれを拒否して見えなくしていた。それがとてももどかしくて、どうしようもなく気になる。それはシロの策略なのだろうと察していた。

《……毘だな……思えば、あいつはイタズラ好きで、意地の悪い策士なところもあったか……》
かつて共にいた頃のシロを思い出した。

同じ時に生まれ出たはずなのに、性格はそれぞれ違う。クロは長男。アカが妹。シロが末の弟。そう言ったのは神の誰だったか、と少し笑った。

《まんまと毘にハメられたな……仕方ない。末っ子のやることだ。許してやるか……》

そう呟いて、クロは目を閉じ、生まれ変わりに臨ひまんだ。



大陸の中でもここ最近、行商人達がこぞって向かいたがる活気ある国といえば、大国カルヴィア。大国とは言われていても、特筆すべきものはなかったはずの国だ。もちろん、貧困に喘あえぐ国々の中では、比較的平穏であった。それが理由で嫉妬しつとされることは多々ある。

だが、今最も注目されているのは、大陸中の国々に跨る組織——商業を司る商業ギルドさえも一目置く商會が生まれたことだ。

その名は『セイスフィア商會』。一年余りで大商會と呼ばれるまでになった存在だ。

そんな商會が、更なる王都の發展のためにと、行商人や露天商達に提供した場所がある。

そこでは、店主達が集まって休憩できる場所もあり、今日も多くの店主達の姿がある。決まって会話に上がるのは、セイスフィア商會のことだ。

「なあ、大聖女様のところが、一番に目を付けたって本当か？」

この大陸で最も力ある商會といえは、大聖女レナが立ち上げた商會だ。大聖女という立場もあり、大陸中の国々にいくつか支店を置いている。とはいえ、全ての国に店舗としての支店があるわけではなく、教会内に間借りしている所もあった。取り扱う品は様々あり、国の復興に役立つものや貴族の嗜好品など、幅広く商売をしている。トップが大聖女とあって、信頼も厚い。

因みに、この世界には大聖女を筆頭に聖女が五人。大聖人を筆頭に聖人が五人任命されており、それぞれが好きな分野で活躍している。聖女や聖人というのが主な職業で、副業をそれぞれ趣味として行っているという感覚だ。

好きなことをして、好き勝手にしているという認識で、教会関係者はたまに頭を抱えるが、聖人や聖人は外面が良く、人々の生活にも貢献しているために、一般からの印象はとても良く、きちんと崇められている。

「それな、俺も確認した。間違いないらしい。それも、大聖女様の商會の方が商品を欲していて、

大聖女様自ら、頼み込んだんだと」

休憩所の一角で、そんな話が興奮気味にされていた。

つい半年ほど前まで、この王都では行商人や露天商達は肩身の狭い思いをしていた。こんな会話なんてできる状態でもなかった。だからこそ、その状況を変えてくれたセイスフィア商會のことは知りたいと思うものだ。

「は？ 大聖女様の商會から商品を仕入れているってわけじゃないってことか？ 逆？」

「そうなんだよ。大聖女様のところの商品なんて、仕入れられるまでめちゃくちゃ審査とか厳しいのに」

「私のところも、毎年審査に落ちています……」

「俺も……」

「私もです……」

それほどまでに取引先を厳選する大聖女の商會が認めたというのは、高い質を持つ商會であるという一つの大きな指標だ。

「……一体、どんな御人なんだろうなあ、セイスフィア商會の商會長つてのは……」

「あの商業ギルドの女傑、ミフナ殿も頼りにすると言っし、引退した大店の會長だとの噂もあるが……」

セイスフィア商會の商會長と会えるのは、契約が取れた者だけだと言われている。未だにはつきりとした人物像が出てこないのは、契約できた者達が誤魔化すからだ。

最初は、本当のことを言ったところで誰も信じなかった。だから誰も口にしなくなった。次第にその存在を知っているのは、成功した者だけだという流れができ、神の奇跡と同じで、見たことを口にしない方が幸せになれるということが信じられていった。

実際、セイスフィア商会と契約ができた者達は、大成功を掴んでいるのだ。これにより、信憑性が増していった。

「私は、元上級冒険者の方ではないかという話を聞きましたよ。商会が支援したエントラー領の孤児院に併設された学校。あの建物に使われているトレントの材木を、商会長自ら現地調達したというのは本当だそうですから」

「ああ、義足や義手、健康ランドのこともありますからなあ。商会長自身がそれを必要とされているのかも知れません。そうなると、元上級冒険者というのも頷ける」

納得のいく予想がいくつも出てくるが、それが当たるとはあまりない。

「たまにここにも来る綺麗な顔の少年がいるだろ？ その子が商会長じゃないかって噂もあるよ。あの子、実際にセイルブロードの従業員達に頼りにされていたし」

「いやいや、ないって。大商会だぞ？ 子どもには無理だよ」

「そうそう。あの柔らかいパンとか、実際に商会長が最初のパン職人達に作り方の指導をしたって話だ。子どもの話を、あの頭の固いパン職人達が聞くわけがない」

「『正確に』」

こんな風に、正解に近付いてもすぐに否定されて終わるのだから、本人や正体を知る者達は笑い

を堪えるのに必死だ。

「それにしても、すげえ場所を提供してくれたもんだぜ。ここ、半年前に来た時は、貧民街だったんで、危ねえから近付くこともなかったんだがなあ」

王都の南側一帯。そこは、特に貧しい者達の住む区画が広がっていた。路上生活をする者達も多く、酷い臭いがしている場所もあった。しかし、そんな場所が、今や様変わりした。区画整理がされ、大きなメインストリートもある。路地にも光が入り、蹲っている者は一人もいなかった。

「ああ……はつきり言って、他の国でもやって欲しいよ。商業ギルドの監督もあって、あくどい商売してる奴らは紛れ込めねえしなあ」

そこは、広く取られた道だ。しかし、馬車が通るわけではない。メインストリートよりは一本中に入っている。

「その上に、国の騎士さん方が見回りもしてくれればなあ。俺らも客も安心だ。それだけいい場所で商売ができるのに、場所代は許可証の発行料に含まれているしよお」

行商人や露天商は、その土地で商売をする場合、商業ギルドで販売許可証を発行してもらおう必要がある。その許可証の金額は土地によって違う。当然、有効日数によっても変わる。更に、店を広げられる場所ごとに金額が指定されており、それも別で支払わなくてはならない。

これに加え、全国一律ではあるが、売り上げの三パーセントの納税義務もある。場所によっては治安も悪いために、商品をダメにされることもしばしば。中々に厳しい現状だった。

「はつきり言って、ここまで治安も良い場所、人通りも申し分ない場所で店を広げられるなら格安

だぜ」

場所代以外にも払うべきものが含まれるので、許可証の発行料自体はむしろ高い方だ。しかし、用意された環境が料金以上の見返りを商人にもたらしていた。

「そうですね。その上に、雨風をしつかり避けられる……今までは、販売許可期限内でまともに店を開けられた日は半分あれば良いところだったというのに、その損も出ない」

「それだよ！ 日数もつたいたいなくて、無理に雨の日にも店を開けて、客も来ないので商品にダメにするだけの日もあったが、雨の日でも客が普通に来るし、苦にならない！ 最高だよ！」

「ああ、これだけでも有り難いのに、野宿や安宿に泊まらなくても良い借家付き……騙だまされているんじゃないかと思っただぞ……」

「あ、それ、私も最初思いました」

「俺もだ……」

彼らに用意されたのは、セイルブロードのように屋根が可動式になった、一見するとアーケード街だ。しかし、店舗としては使用できず、その建物の前に露店や屋台を出す。後ろの建物は彼らが使う宿だ。

長屋ながやのようになっており、ベッドなど家具付き。露店の荷物なども入れ込めるスペースもあり、トイレとシャワー付き。はつきり言って、借家としてもかなり良い家だ。

「許可証代が、最初は高たかえなと思っただが、あんな借家付きなら間違いなく破格だぜ。マジで騙だまされてんじやねえかと思っただけぞなっ」

金額を聞けば、そんなに払えるかと怒鳴りたくなる者もいるだろう。しかし、明細を見るとそんな金額でいいのかと逆に戸惑う。

「うちは子どもがいるんで、助かりましたよ。夜もぐっすり眠れるし、妻が長旅で体を壊していたので、しばらく商売もできずに安宿に引き籠こもらなくてはならないかと思って憂鬱ゆううつでしたが、私は店を開けられるし、妻と子は遠慮えんりょなく休めて本ほん当とうに有あり難がたかったです」

「そうそう。そういうことあるんだよね。調子悪くても、宿に置いておくか、顔色悪くても店の端はしにいるかしかなくてさ」

明らかに調子が悪そうな店員が何もせずに端はしにいるのは、客にも印象が悪い。他にいる場所がないのだから仕方がないのも分かるが、本人も嫌なものだ。しかし、ここではすぐ裏に引込める場所があり、きちんとしたベッドまである。これほど有り難いものはない。

これが全て、セイスイア商会によって実現したのだと、彼らは商業ギルドで説明を受けたのだ。感謝はしなくても良いが、商会に迷惑はかけないようという一言と一緒に。

「本当に、こんな待遇良いとか、夢みたいだよ。この商業ギルドは酷ひどかったし、来るのやめようかと思っていたが、来て良かった」

「だよな。あれは酷ひどかった」

商業ギルド長が半年ほど前に代わり、職員達もほぼ一新された。町に店を持つ者とそうでない者の扱いがはつきりと区別されていたのだが、それも今はない。

現在のこの王都のギルド長は、公爵領都で商業ギルド長ミラナの右腕として長年働いていた女性

だ。第二の女傑と噂されている。

「昔のギルド長は良かったって何度も愚痴った親父が、問題のあったギルド長が捕まったって聞いて、年甲斐もなく飛び跳ねて大喜びしてたぜ」

「その審判を公開したそうですね。それがすごいお祭り騒ぎだったとか！」

先頃行われた公開審判のことを、噂でしか知らない者は多い。しかし、この王都の誰に聞いても、凄かったと言われる。そして全容を聞いた者もまだまだ少なかつた。

「つてか、居心地が好過ぎて、許可証の延長しまくってる奴らもいるんだけど。この商業ギルド、商売上手過ぎだろ！」

ついつい長居したくなるのだ。延長料金は安くはない。それでも良いと思えるくらい居心地が良かった。

「あははっ。確かに。延長の上限も決まっているんだろう？　そこ過ぎたら、再登録らしいじゃん。場所も変わるつて」

「それでも良いからつて長居してんのが何人かいるぜ？」

「いやいや、そう続かねえよ。お前らは行商人や露天商だろ？　仕入れしてこねえと商品なくなるから」

「「「あ……」」」

指摘したのは、休憩所に紛れていた巡回の騎士だった。

「え？　気付かなかつたのか？　やべえ、おもしろっ」

「こら、失礼だろ」

笑っている騎士と組んでいる騎士が注意するが、現実を受け止めなくてはならなかつた。

「「「ああああ……」」」

頭を抱えながら、悲愴な声が絞り出される。そんな様子を見ていた騎士は同情するような目を向けてそつと声をかける。

「そう落ち込まずに。また仕入れしてここに来ればいいでしょう。そうだ。エントラール領の方は、また違った感じらしいですよ。そちらでも店を開いてみてはどうですか？　確か、特典が違うはずですよ」

「特典……？」

「あれ？　知りませんか？　納税額に対して、最後に特典が貰えるんですよ。ここでは、パン屋とセイルブロードで使える割引券で……エントラールは……」

そこで、笑っていた騎士の方が答える。

「あっちは、割引券と健康診断半額券だつてさ。それと旅立つ日に申請した人数分の弁当サービス。許可証を返した時に引換券を貰えるんだ。あそこの弁当とか、やべえだろ」

「食べ終わったらもう戻りたくなくなるつて噂だな」

「「え……」」

旅立つても、最初の野営地でその弁当を食べて美味しさに衝撃を受け、引き返したくなるそうだ。「そりゃそうだぜ。俺も、あそこの弁当が食べられるから、夜勤も頑張ってたんだ。あつたかいご飯

とか……やべえ、思い出すと泣けてくる」

「兄ちゃん独り身？」

「おう。兵舎の食堂はあるが、朝とか深夜はメシ出ねえからさ。適当に冷や飯とかパンとか食って
凌いでいたんだが、おっちゃんら知ってるか？ 自動販売機！」

「「じどう販売機？」」」

試験運用を終え、セイスフィア商会が設置した自動販売機。現在は、各兵舎前とセイルブロード
の外の壁に埋め込まれて並んでいる。

「仕事で夜、酒場に入るのも億劫な時ってあるだろ？ そういう時に家に持ち帰って食べられる弁
当が、金を入れれば出てくるんだよ。それもほつかほかでっ」

「……出てくる？」

「そう。ボタン押すとその弁当が取り出せるんだよ。人がいるわけじゃねえから、夜中でも朝方で
もいつでも買える」

「店番がない……」

「あ、だからって盗もうとすんなよ？ あそこは、めっちゃ怖いウサギ様が報復に来るからさ。兵
舎前は俺らいるし」

「ウサギ様……」

この「ウサギ様」も、王都で広く認知され始めている。ウサギ様とは、フィルズの作り出したウ
サギ型の魔導人形——隠密ウサギの愛称だ。

実際に悪いことをした者の何人かが、数匹のウサギ様によって簀巻きにされ、町の外に放り捨て
られていた。それを見た者達が広めたのだ。『悪いことをすればウサギ様に町の外の森に捨てられ
る』と。おかげで子ども達のイタズラが減ったと、お母さん達は大喜びだ。

「そんな高くもないし、おかずだけのやつもある。時間がない時とかもオススメだぜ。作ってもら
う時間要らねえし、セイルブロードで買えばいいし、余計なもの買っちゃまうしなっ」

「アレは罠だよ……目当ての物を買っただけじゃ終わらない……」

「帰り際のところ、いい匂いさせたポテイモとか売っていると、ついついな〜」

「甘いのと塩辛そうなのと二つ用意してあるのもな……」

「必ず二択とか、罠だわ」

「自動販売機も、結構品物変わるから、絶対見ってしまうしな……」

自動販売機には、弁当と飲み物、お菓子が入っている。前を通るとついつい覗いてしまう。

「罠だな……」

「罠だぜ……」

「「「……」」」」

商売上手過ぎると誰もが日々感心していた。罠だ罠だと言いながらも、気付いた時には、セイス
フィア商会は王都になくはならないものになっていたのだ。



行商人や露天商達だけでなく、騎士達からも色々と言われているとは知らないセイスファイア商会の商会長であるフィルズ。彼は今、行商人達がいる場所とは本通りを隔てて反対側の、新たに建てられた商店街の視察に来ていた。

「匂いの方も大丈夫だな。換気も問題なしと……」

「まったく、えらいことを考えるねえ」

露天商や行商人達の力を借りて商店街を作り上げようと考えたのは、本当に思いつきだった。そんな思いつきが出てくるのは、フィルズが地球での前世の記憶を持つからだ。うつすらと夢で見るだけだったその記憶も、生かすようになってからは鮮明になってくるものもある。

両親の仲も微妙で、第一夫人からの嫌がらせなどで鬱々としていたために、神々はフィルズの精神を守る意味もこめて、前世の記憶を呼び起こしていたのかもしれない。フィルズは神々の愛し子でもあった。

フィルズのように別の世界の魂を持つ者は、かつて賢者と呼ばれ、神々によりこの世界に招かれていた。この世界を発展させるためだったが、権力者の介入でその賢者達は追われたり、苦しい立場になったりすることもしばしばあったらしい。

そうした要因により、神々が願ったようには世界は発展しなかった。しかし、賢者が生きた証として、それぞれが得意とした分野の研究の資料は残されている。隠されているそれらを回収し、この世界に還元するのが神から願われたフィルズの役目だった。神々も推奨とあって、フィルズは自重なくこうした案を発信し続けている。

「これは素晴らしいですよ！ 絶対に流行りますよ！」

「お前は落ち着きな。商業ギルド長がそんなにはしゃいでどうするんだい。下の者に示しがつかないよ」

フィルズと共に見て回っているのは、エントラー公爵領都の商業ギルド長のミラナと、その補佐であったカーリーナだ。彼女は王都のギルド長になった。四十代、それも女性ということで、不安に思う者もいなくはない。本来ならば、商業ギルドは実力重視。性別や年齢がとやかく言われることはない。

しかし、ここ王都の商業ギルドは偏見でいっぱいだったため、陰では色々と言われているようだ。カーリーナはそれに負けず、今までの腐敗した商業ギルドの印象を払拭しようと努力している。ミラナを一番傍で見て長年手本としていた人だ。信頼を得るまでそう何年もかからないだろうとフィルズや一部の商会の者達は思っている。

「いえいえ！ これは興奮せずにいられませんよ！ ミラナ様はこの商店街計画書をご覧になりましたか!?」

そう言って、カーリーナはさらに興奮した様子で、手にしていたファイルに綴じられているものを見せる。

「……何の計画書だって?」

「これ！ これですよ！ 将来的には、ここで、先に使っているあの露天通りの一つ一つを店舗として契約し、店を持ちたい行商人達を住まわせるんです！」

「……ん？　そうか、今は場所を貸している状態だ……それを、買い取らせて店とする？　ということかい？」

「その通りです！　で、こちらの通りでは、試験的に屋台を出している者達も許可します！」

ミラナは信じられない思いで、設備点検をしていくフィルズを見下ろす。

「だから換気がどうのと……なんてことを考えるんだい……店か……だから借家の中に馬車も入るくらいのスペースがあるんだね？」

「そういうこと。ここにさあ、柵とかテーブルなんかを置けば立派に店になると思わねえ？」

まだ人の入っていない商店街。同じように作られた店舗の一つの可動式の扉を開けると、そこには、無駄に広いスペースがある。行商人の持つ馬車一台は余裕で入ってしまうだろう。その奥と二階に居住スペースが確認できた。

「これで、少し頑張れば店を持てる商人が増える。店舗の配置はギルドに任せるぜ？　隣に全く同じものを売ってる店が並ぶなんて面白味のないことはやめてくれよ？」

「うっ、確かにそうですね……」

カリーナがうんうんと頷く。

「ただ、二店舗分ぶち抜きで使いたいってことがあるかもしれん。その場合は、この壁が扉になつてる」

壁に扉があった。そこを開ければ、隣と繋げて使うことができる。使わないならば、柵を置いたりして塞いでしまえば、気にならないだろう。

「すごい……これは、世界中から商人が集まりそうです……」

再び興奮し出すカリーナ。そして、今度はミラナも同様のようだ。

「……フィル、これ、公爵領では……」

「あそこではちよいと厳しいな。だから、いま計画書を出そうと思ってるのは、元男爵領のミルトーラだ。あそこは、まだ区画整理もできてないからな。住民も少し戻って来たが、まだまだ人が足りない。丁度、人寄せにもなるだろう？」

領民が少ないのは、税収の観点からしても問題だ。かなりセイスファイア商会が領地を弄いじっている土地も買っているの、今のところそれほど悪い数字ではないが、本来ならば一つの商会で保っている領地など大問題だろう。

元男爵が課かしていた重税に耐えかねて夜逃げするしかなかった領民達も、すっかり様子の変わった土地に少しずつ戻って来ている。だが、ほとんど何も持たない者達ばかりだ。生活もまだまだままならない者が多い。その支援もセイスファイア商会がしている状況だった。

「それはあるね……よし。早めに計画書を出しておくれ。公爵に話は通っているかい？」

「いや、まだ。ようやくこの前の騒動で抜けた貴族家の穴埋めができたところだし」

「そういえばそうだったね……」

半年ほど前、貴族の大規模な粛清しゅせいが行われた。主犯として多くの貴族達を扇動せんどうしていたのは、第一王妃メルナの父である侯爵こうしやくだった。大物が率ひきいていたことで、追従していた家門は多く、必然的に粛清される人数は多くなってしまった。消えた家門も少なくない。

これにより、領主がいなくなるという領地まで出て、早急にその穴埋めをしなくてはならなくなつたのだ。領地替えとなる家もあつた。

「半分近く、頭が入れ替つたからな」

「よくよく考えると、異常さね」

フィルズが作り上げた犯罪者用の金の腕輪を嵌められた貴族達は、その腕輪の効力によって、嘘が吐けなくなつた。そのおかげで自由もスムーズに進んだのだが、想定外の事態が待っていた。

「もうさ、ファシーと宰相さいしやうで捕まつた貴族達を殴り倒しそうな勢いだったぜ。連中、余罪がかなりあつたらしい。ファシー達は散々頭抱えた後、虚ろな目をして捕まつた奴らに迫つてたつてさ」

「それはまあ……よっぽどだね……」

ヤクザ者もびつくりなキレ具合だつたらしい。『おい……もうねえだろうなあ？ あ、ん？』と目の据わつたファスター王や宰相リゼンフィアに睨め付けられて、泣きじゃくりながら吐いた者もいたとか。

「罪状が確定すると同時に、その家を継げる者の素行調査結果を確認して、残す家門は新たな当主も決めないといけないってんで、毎日忙しそうだったぜ」

「手伝つてやつてたんだらう？」

「調査の方はな。黒子達が飛び回つてた」

「あの子ら、優秀くわうしゆだよねえ。羨ましいよ」

「必要な時は言つてよ。あいつら、暇なのは嫌らしくて、仕事くれつて煩うるせえの」

「それはいいねえ」

「……まあ……な」

良くはないのだ。黒子という名のフィルズ直下の諜報部隊の面々は、元は暗殺者や諜報員ちやうほういんとして裏で生きてきた者達。それを改心させたのは良いが、今度はすっかり仕事人間になつてしまい、仕事がないのが不安だそう。待遇も良いので、申し訳なさもあるとのこと。

因みに、彼らは思いの外ほか、フィルズが面白半分で導入した、日本由来の黒子スタイルを気に入つたらしい。顔が布で隠れて見えないことと、肩に乗せた相棒の鳥が腹話術のように代わりに話してくれることが良かったようだ。

彼ら自身は身振り手振りで道化のようにおどけるだけ。全くの別人のように振る舞えるのは、一般人とどう接したら良いのか内心困つていた彼らには、助けになつたのだろう。

「そういえば、子ども達と遊んでいるのを見たねえ。案外、子どもの扱いが上手い」

「あ、うん……自分達でも、びつくりしてたよ。お母さん達のお茶会ちやかいに紛まぎれてるのもいて……あいつら、実はコミュ力高いわ」

もちろん黒子スタイルだが、いろんなところに潜んでいるというか、人と交流していた。恐らくそれも情報収集の一環で、仕事しているという感覚なのだろう。変に気負うこともなく、楽しそうではあるので、良かったと思うことにしている。

視察を終えた翌日。フィルズは執務室で、ミラナと話していた元男爵領での施策についての計画

書を作成していた。

王都での露天商や行商人との件は、商業ギルドに投げることに決めている。現在の通称『露天通り』という先に試験運用している通りと、新たに用意した通りを中心にして、貧民街と呼ばれていた地区が生まれ変わろうとしていた。これも含めて、この先は国と連携していくべきだと提案するつもりだった。

それを考えて頬杖をつき、笑いながらペンを振る。

「まあ、ファシーや親父が忙しいって怒りそうだな」

やっとゆっくりできると思っているところで、こんな案件を持ち込むのだ。きつと愚痴るだろう。最近では、ファスター王からの通信も二日に一度に減っている。それだけ余裕がないのだ。

「頭のすげ替えはできたが、処分が後回しになってるしな……まだ落ち着くには早いかな」

メルナ妃をはじめ、多くの貴族達の処分がまだ済んでいない。軽い罪の者達は、着々と処分が下されているのだが、余罪がたんまりと出てきた者達の更なる調査に時間が掛かっていた。

「まあ、あつちは任せるとして……」

そこでドアがノックされた。

「会長。セラとユリです」

「おう。入ってくれ」

「はい」

「失礼します」

やって来たのは、すっかり仕事にも慣れて、この王都支店を任せられるほどになったセラと、学園の売店を任せているユリだ。彼女達は、闇ギルドで奴隷として囚われていた他国の元令嬢。高位貴族の令嬢らしく、貴族の客への対応も堂に入ったもの。すぐに現場にも慣れてしつかりと働いてくれた。

「呼び出して悪いな。座ってくれ」

ファイルズはファイルを二つ手に取り、二人を座らせた応接用のソファに向かった。二人の前に座るとそれぞれにファイルを差し出す。

「これは？」

「……？」

不思議そうにしながらも、二人はファイルを受け取った。ファイルズはこれについての説明をする。「二人のことを改めて調べさせてもらった。そこには、お前達が修道院に送られる原因となった騒動の詳細と顛末、それと現在までの関係者の様子についての調査結果がまとめられている」

「……」

「嫌な気分になるかもしれないが、一度目を通して欲しい」

「……分かりました」

「……はい……」

二人は顔を顰めながらも、それぞれのファイルに目を落とした。

その間、ファイルズはお茶を淹れようと立ち上がる。淹れたのは、心が安らぐ香りの良いハーブ

ティード。フィルズの間では、ジャスミンティーに近い香りだと思っている。合わせるのは、桃のようなフルーツ——パルタの果実を閉じ込めたゼリーだ。

それらを用意し終えるところで、二人ともほぼ同時に読み終わったらしい。表情から見ると、少し苛立ちを感じていそうだ。

「腹も立っているだろうが、落ち着いて、これでも食べながら聞いてくれ」

「っ……はい」

「……っ、はい」

お茶の香りを胸いっぱい吸い込めば、幾分か眉間の皺はほぐれたようだ。

「まず、セラ。騒動の原因になったのは、この国でも問題になっていた魅了系の魔導具で間違いないと確認ができた。報告書通り、すでに当事者達の処分も終え、国はセラの家族への賠償をと考えている。お前は死んだものとされているようだからな」

「やはり……そうですか……」

セラは婚約者であった者ある人物に誘惑され、更にその人物を嫉妬で貶めようとしたとの冤罪を掛けられて婚約を破棄する事態となった。家族からも切り捨てられて修道院に入れられるところだったのだが、そこを闇ギルドの者達に襲撃され、攫われたのだ。

家族や知り合いは、彼女を探そうともしなかった。そう思えば、気持ちも沈むだろう。味方だと信じたかったはずだ。自分は悪くないと信じて欲しかっただろう。その胸の痛みを察してフィルズは続けた。

「だから、お前が生きていたことをあちらの国に伝えた。賠償は、家族ではなく本人にすべきだとあちらの国の神殿長からの説教付きで」

「……え……」

フィルズは楽しそうに笑ってみせる。

「セラは一度、教会の保護認定を受けているだろう？ だから、教会が動くのに問題はない。賠償金も、教会経由で届けてもらうから後日受け取ってくれ」

「っ、そ、そんなっ。国も出た私にっ……」

貴族の令嬢としての矜持も高かったのだろう。セラにとっては、国での役目を果たせなかったということは、責任を取るべきことだった。生存が確認されたのなら、育ててもらった分の賠償をそれこそ自分が払う必要があるとまで考えていたようだ。

「賠償金は、私の養育費として家につ、会長もクラルス様もそうしてこられたと聞いています！」

「あゝ、それ聞いたから余計にかゝ」

フィルズが公爵の息子であると知られたことで、商会を設立するに至った理由や、どうやって家を出たかなど、人に聞かれればフィルズも母クラルスも答えるようにしていた。特にクラルスに聞けば、劇的な感じに多少脚色されて教えられる。

その中でも、今までの養育費と生活費だと言って、稼いだお金を公爵に叩きつけて出てきたという部分に、女性達はときめくらしい。

この話を耳にした町の女性達が、仕事も子どもの世話もしない碌でなしの夫達に叩き返すんだと

言って、バリバリ働き出したという。計算の得意な従業員を捕まえて、生活費の試算もお願しているほどだ。近々、多くの夫達は家を放り出されるか、家に取り残されることになるだろう。

「いやいや。お前への賠償は、名誉毀損きんげんに関するものだ。国のために努力してきた令嬢を冤罪で切り捨てたなんて、国からしても汚点だ。その目が曇りまくっているって証拠だからな」

「そんな……良いのでしょうか……」

「いいんだって。貰えるもんは貰つとけ。それと、お兄さんが当主の座を蹴って、お前を探し回っていたから、保護している。会う気があるなら滞在先に案内しよう」

「っ、兄が……」

「ああ。それを読んで分かっただろうが、最後までお前の無実を証明しようとして一人で奮闘していた。冤罪だと声高こゑたかに宣言したことで、彼も家から勘当かんとうされかかっていたようだが、最終的には自分から家を出たようだ」

「っ……兄さん……っ」

セラの兄はたった一人で調べ、証拠をいくつか提出して無実を訴えた。だが、セラを陥れた令嬢によって魅了の魔導具で支配された者達は聞く耳を持たない。それならせめてセラを探し出そうと国中を駆け回っていたらしい。危ない場所にも出入りしてボロボロになっていたところを、隠密ウサギが発見したというわけだ。

「助けられなかったことをかなり気にしているようだ。会うかどうかは、お前の気持ちを尊重すると言っていた」

「っ……少し考えます……」

「ああ。次にユリ」

「……はい……」

「母親に会いたくないか？」

そう尋ねれば、ユリは最近かなり豊かになっていた表情を固くしていた。何を言われたのか分からないというようにも見える。しかし、ゆっくりとユリは口を開いて確認する。

「っ、母が……生きていますか？」

「教会に保護されていた。病に侵おかされているようだったから、公爵領の方に運んで治療を行っている。大分回復したようだ」

「っ、うそ……っ、い、生きてっ……生きてた……っ」

生存は絶望的だと思っていた母親が生きていると知り、ユリは涙を流していた。

「もう少しで、完全に容態も安定する。そうしたら、会ってくるといい。魔導車を出してやる」

「っ、ありがとうございますっ」

ユリは、実の母親が行方不明となり、後妻としてやってきた義母とうまくいかず、最後には年老いた金持ちの後妻にやられるところだった。しかもそれを、家族の誰もが望んでいたのだ。父親でさえ、味方にはならなかった。だから、唯一家族と思える母親が生きていたというのは、ユリにとってはとても嬉しいことだったのだ。

「それと、その母親が行方不明になったことについてだが、どうも後妻が手を回していたらしい」

「え……」

「そのところの調査だが、ユリが望むなら調べられる」

ユリは少し予想していたのかもしれない。膝ひざに置いていた手は、キツく制服のズボン握っていた。そして、絞り出すようにして告げる。

「……お願いしてもよろしいでしょうか……」

その目には、許せないという強い怒りが宿っていた。

「もちろんだ。調査好きの奴らがウズウズしてたんだよ。こっちでも、賠償とか取れたらガッツリ取るか?」

「根こそぎお願いしたいです!」

「よし。任せろ」

「はいっ!」

すぐに伝達され、調査は開始されたはずだ。

少しスッキリしたのか、ユリはゼリーを口にして気持ちを落ち着けていく。セラもかなり落ち着いてたようだ。

「さて、二人にこうして過去を清算させるようなことをしたのは、ここで今後もやっていく意思があるかを確認したかったからだ」

「っ、え!」

「わ、私達クビですか!」

半ば立ち上がりかけるほど、衝撃だったらしい。これに、フィルズは嬉しそうに笑った。

「いや。寧ろ逆だ。この王都支店を二人に任せたい。支店長と副店長ってやつだ」

「っ!!」

「そう重く考えなくてもいい。クマ達もいる。重要な案件や俺に確認が必要だと判断したら、すぐに連絡も取れる」

イヤフィスでの連絡もできるし、手紙や鳥でしかやり取りできなかった少し前のことを考えれば、格段に連絡が取りやすくなっている。

何より、この一年半ほどのデータが魔導人形のクマ達には蓄積ちくせきされている。フィルズが数ヶ月留守にしたとしても問題のない状態を保つことさえできるだろう。とはいえ、ここまでは言わない。彼女達ならば心配はないはずだ。

「俺は冒険者としても活動する。それによって新たな商品の案も出るから、外に出ることを疎おろそかにしたくないんだ。だから、支店長つてのを考えていた。そこで、お前達つてことだ。どうだ?」

「……っ、やらせてください!」

「私も! やります!」

二人は大きく頷いた。

「助かる。セラを支店長に。ユリは副店長で頼む。ユリには学園の売店の店長も引き続きお願いしたい」

「分かりました」

「はい。もちろんです！」

これで王都支店はほぼフィルズの手から離れた。こうなれば、ようやく王都に来たらと計画していたことを実行できる。

「早速明日から数日は留守にする」

「公爵領にお歸りに？」

セラの問いかけに、フィルズは得意げに答えた。

「いや。冒険者ギルドで三級の昇級試験を受けてくる」

「え……」

「三級……？」

フィルズの年齢で三級なんてことは、普通は考えられない。セラやユリでさえ知っていることだった。

ミッシェン② 三級試験を受けよう

上級冒険者になるための昇級試験には、すいせんじょう推薦状が必要となる。

まずは半年ほど拠点としたギルドのギルド長、三級以上の冒険者、ギルド職員、更には町のまめ役か一定以上の売り上げランクの高い店の店主各一人以上の推薦が必要だった。

ギルド職員は、一番多くその冒険者と顔を合わせる。親しくなった他の冒険者からも、推薦する冒険者についての噂うわさも聞くことができるため、人柄や他の冒険者達との関係などを鑑かんみて判断する。町のまめ役や店主については、冒険者と町の人々との関係を確認してもらっている。問題を起す冒険者には推薦はやれない。

特に三級より上の上級冒険者は、人柄が重視される。貴族や商会の重役達の護衛なども依頼として受けるためだ。

そんな推薦状を汎山携たかさんなまえて、フィルズは久し振りに冒険者として王都の冒険者ギルドにやってきていた。

「ん？ 人が少ないな……」

フィルズは、王都に来て半年以上経つ。しかし、冒険者ギルドには立ち寄ることがなかった。用があれば、第三王子のリュブランや祖母のファリマス達に任せるなどして、結局顔を出していなかったのだ。討伐や採取などしてもそれらは商会で使えば良い。わざわざ買い取りしてもらって、また買うなんてことはする意味がないため、余計に足が遠のいていたのだ。

「王都ならもつと人がいるイメージだったんだが……」

フィルズの基準は、町にいる人の五分の一が冒険者という辺境や、それに近い状況の公爵領の冒険者ギルドだ。守護獣であるビズの力を借りて、他の領地への日帰り配達などの依頼も受けているため、冒険者が少ない領のイメージも持っている。だから、王都はそれとは異なるだろうと思っていた分、違和感を覚えた。

依頼用紙の貼り付けてある壁を流し見ながら、受付に向かう。上級冒険者の昇級試験は、各国の王都でしかできないので、専用の【昇級試験受付】の窓口があり、そこに向かう。

しかし、受付に座る女性の様子を見て嫌な予感がしていた。

「典型的な大して仕事しないのに、定時上がりするOLっぽい……」

化粧は厚め。貴族女性並みに髪を盛り、爪を熱心に磨いている。そして、横を向いて足を組み、カウンターに肘をつく。

「……関わりたくねえ……」

もはや、テンプレ展開しか見えなかった。

今日の試験手続きは無理かなと思いつつも、覚悟を決めて、その受付の前に立った。

「あの……昇級試験の受付をしたいのですが……」

「どうぞ。これに記入して」

「……はい」

こちらをチラリとも見ない。爪に夢中だ。差し出してきた紙に記入していく。その間に、フィルズの方が、逆に受付嬢を観察した。

爪はそれほど長くない。親指の爪だけは極端に短く、少しガタついているように見えた。これは、考え事などする時に噛む癖がありそうだ。面倒な方に考え込む人でないことを願う。

「……できました」

「はいはい。じゃあ、頑張つて。会場は右奥」

そう言って紙を回収し、適当に箱に放り込んで、代わりに差し出してきたのは、手のひらサイズの長方形の小さな木の板。そこには、【昇級試験】とだけ書いてある。同じものを見たことはある。各級の昇級試験で使うものだ。

この間もチラリとも見てこない。恐らく、声から判断して、若い下級の昇級試験を受けに来たと思ったのだろう。そもそも、上級の昇級試験実施はそれほど多くないはず。推薦状を貰うのに普通は相当苦労するとも聞いている。年齢から判断するのは間違っていないかもしれないが、仕事をする者としては最低だ。

「……」

受け取った木の板を見つめてどうするかと一度考えたが、このまま行くことに決めた。



推薦状の提出を求められなかった時点で、勘違いしているのは明白だ。

「はあ……」

ため息を吐いて、フィルズは奥に進んだ。せめて、まともな人が試験官であることを祈る。

「頼むぞ……」

そこには、広い訓練場があった。そして、屈強な男が三人、体を動かしていた。

「お？ 昇級試験か？」

「……はい……」

一人の壮年の男が嬉しそうにこちらを見た。

「おうっ。いいぞ！ 何級だ？」

「……三級です」

「よし、三級かつ、三級!？」

「え!? その歳で!? 天才か!？」

「まてまて。つてか、三級ならそもそも……つ、あの女ああつ!!」

一番若そうなのが一人キレた。凄い勢いでフィルズの横を駆け抜けて行った。

「あつはつはつ。やつぱ、あの女はダメだなあ」

「いやあ、おやつさん。笑い事じゃねえつすよ。アレ、殺されないか？」

そう言いながらも、一人の男は呑気にしている。壮年の男は笑顔だ。

「あゝ、悪いな坊主。そうだ。推薦状を確認させてもらえるか？ 受付では見せてねえだろ」

「はい……信用できなさそうだったんで」

「いい判断だつ。で？ こっちで俺らもロクな奴じゃなかったらどうしてた？」

「半殺しにしてからギルド長を呼び出してました」

「わっはっはっ！ 気に入った！」

「いやいや！ 半殺しって言ったツスけど!?」

「それもヨシ！」

「良くねえよ！」

楽しそうな試験官だということはよく分かった。

受付嬢を締め上げるべく出て行った男が戻って来たのは、推薦状を壮年の男が確認し始めた時だった。

「さっさと歩け！」

「ちよっと！ 酷いことしないでよ！ これだから冒険者は嫌なのよ！」

文句を言いながら、腕を掴まれて半ば引き摺られるようにして来たのは、あのやる気のなさそうな受付嬢だ。顔は怒りに染まり、反発しなくて仕方がないというように表情を醜く歪めていた。厚化粧をして、表向きの顔をしっかりと作っていいそうな割に、今の自分がどんな顔をしているのかわからないらしい。

「悪いなあ、嬢ちゃ……ん？ 坊主か。坊主か？」

「坊主、坊主言うなよ。思わず違うって言いたくなるだろ」

何度も言われると、頭に浮かぶのはお坊さんだ。違うと言いたい。

「確認したいのは性別か？ 生物学上は男だぞ」

「おおっ、キレイな顔してるもんだから、悪いな。この女よか肌もキレイじゃねえか。いやあ。どこのお嬢っ……坊ちゃんだ？」

「気になんの？」

「貴族の坊ちゃんなら、この女も素直に頭下げなせ」

「くっ、汚い手で頭触らないでよ！」

彼は謝らせたのだろうか。受付嬢の頭を下げさせようと軽くポンポンと叩くが、それも気に入らないようだ。それを見て、フィルズは呆れた。

「……相手が誰でも、謝るべき時は謝るのが、普通じゃね？ なに、この姉ちゃん。まるつきり、精神がクソガキじゃん」

「っ!! ちよっと！ 今の私に言ったの!? 年上になんてこと！」

「年長者なら年長者らしく、人生経験してますって態度だけでも取り繕えよ。不満顔で他人の前でギャンギャン騒ぐとか、品性のなつてねえ、構ってちゃんなガキにしか見えねえよ」

「はあっ!? ふざけんなっ！ だいたい、あんたみたいなガキが、三級とかつ、堂々と不正してんじゃないわよ！」

「不正ねえ……」

大分、ヒートアップしている女。不正したと言われて、フィルズは怒るところか心底呆れたと溜め息を吐いて見せる。不正ができないように、冒険者ギルドはかなり気を遣っている。その一つが、公にはされていないが、教会の神官や神官長が定期的に行っているらしいギルド長の審査だ。

冒険者ギルドは、命を預かる場所でもある。よって、変な人が頭では困る。神も彼らの人となりをもれとなく確認しているため、ある意味最も信頼できる人ということでもある。

「職員には、あんたみたいな低レベルな奴がたまにいるが、ギルド長は神官並みに信頼と実績のある人しかねえはずだ。そんなギルド長の推薦状も必要になるのに、不正なんてできるわけねえだろ」

「はっ、あんなギルド長が信頼できる!? そんな訳ないでしょ! この私に毎日のように嫌味を言ってくるのよ? あんな奴でもギルド長になれるんだから、程度なんて知れてるわよ」

「……」

試験官三人も、絶句していた。特に連れて来た男の目は『こいつヤベエだろ……』と言っているように見えた。ドン引きとはこのことだ。

フィルズもそろそろ相手にしたくない。

「……なあ、おっちゃん達、この女、なんで辞めさせねえの?」

女を逃さないように、連れて来た男は見張りながら説明してくれる。

「あ、こいつの親父さんは貴族なんだけどな? すげえ良い人なんだよ。領地持ちじゃねえけど、騎士爵から男爵になった誠実な人でさあ」

ギルド長だけでなく、試験官達もその父親とは顔馴染みのようだ。続きを口にしたのは、壮年の男。

「男系の家って言うのか? 全然、女が生まれな家だったみたいでな。育て方とか手探りで、気付いた時にはこんな」

「っ、こんなって何よ!」

「な? 特大の問題児だ。更に、学園が悪かったのか、交友関係がマズかったのか、悪化したらっ」

「人との付き合い方が壊滅的なんですよ」

もう一人の試験官が最初のように呑気に笑っていた。年齢としては、彼も彼女くらいの娘がいても不思議ではない。困った子だと言うような目で見ている。

そして、女を迷惑そうに見つめる隣にいる男が引き継いだ。

「一族揃って悩んだ末に、働けばそれなりに学んでくれるだろうってことになったらしい。で、商家だと迷惑料が幾らになるか分からないから諦めて、知り合いのギルド長に一族総出で、半年預かって欲しいって頭下げてきたんだよ」

商家へ奉公にとも考えたようだが、確実に迷惑になり、損害賠償で家が潰れるのがオチだと判断したらしい。いい判断だとフィルズも思う。こんな爆弾を抱えて店なんて開けられない。

「っ、は!? お父様だけじゃないの!? 一族のって……っ、やつぱり嫌がらせじゃない! 兄達は私を嫌ってるのよ! 何かあるごとに、追放だ、勘当だって言うんだから! あいつらの策略

ね!？」

「策略って……頭下げてくれてんのに、その言い方……あんた、やっぱ精神年齢低いわ。一桁^{けた}じゃね? 若いな」

「どういう意味よ! 私が年取ってるって言いたいのは!？」

「いや、ガキだって言ってるだけだ?」

話も上手く伝わらないようだ。よく試験官達は堪えてきたものだと感じる。もはや尊敬の域だ。とはいえ、ここまでくると、やはりお手上げなのだろう。

「なあ、坊主。こいつ、どうしたら治ると思う?」

「不治の病だとは思いたくねえな」

「このままで、あの家族が気の毒なんだよ……嫁になんて出したら、恨まれるだろ……」

あまりにも手立てがなさ過ぎて、フィルズのような成人前の子どもにまで相談する始末。かなり重症だ。

「完全に事故物件だもんな……貴族なら逆に政敵にぶつけるとか? 生活能力ないだろうし、勘当

したら処刑するのと変わらんかも? いや……もういつそ、教会に預けたら?」

「神官さんに迷惑がつ!」

「声揃い過ぎなんだわ……」

その光景が容易く想像できてしまうのも問題だ。

フィルズからすれば、彼女がどんな道を辿ろうと関係はない。しかし、この場に居合わせたこと

で、変に目を付けられても面倒だ。実際に、彼女は自分がこうして連れて来られたのはフィルズのせいだと思ったのだろう。先ほどから睨み付けてきていた。

ならばと、フィルズは一番自分が安心できる行き先を提案する。

「一度、レナ姉……大聖女に相談してみたらどうだ? こんな性格だと、その辺の神官にも文句言いそうだし」

話を聞き限り、親の立場を自分の良いように解釈した典型的な勘違い令嬢だ。神官達は平民出が圧倒的に多い。貴族令嬢だということを前面に出したがる子どもは、たいていしっかりとその辺を周りに確認している。自分より下の立場だと分かれば、対応は一つだ。

「つ、よく分かるなあ、坊主! 一度教会にも相談に行つたそうだが、こいつを連れて行つたら神官や神官長にも反抗的な態度だったらしくてな。見ていた町の者達の視線に父親が耐えられなくなつて、相談以前に退散したんだと。すげえだろ」

父親としては、相当覚悟を決めていたはずだ。最終的に、どこかの修道院にとも考えていたのだろう。本人を連れて行つたところを見ると、どうやら、父親は相当人が好きそうだ。

普通、ここまでの困つたちゃんならば、問答無用で修道院に放り込んである。恐らく、神官長も交えて修道院の話をすれば、娘も少しは考え直してくれるのではないかと思つたのだろう。

そんな親心を微塵も理解しななさそうな女性を、フィルズはチラリと見た。まだ睨んでいる。「そりやすげえわ……なら、町に出たらなんか言われねえ?」

「注目されてるのが普通だつて顔してるぞ」

「それもすげえな……」

神経図太い勘違い令嬢はここまで迷惑なのかと、フィルズは改めて『何この生き物』という目で見てしまった。

「っ、何よ！ その目！ その生意気な目を向けるんじゃないわよ！」

「……やべえな……」

貴族との関係が薄い平民達にとつてみれば、きっと未知の生物との出会いくらいの衝撃があるだろう。実際、彼女が出歩くと、教会で神官や神官長に偉そうに怒鳴っていたところを見た者達からの噂も広がっており、『あの女が例の……』と奇異の目を向けられるということだ。これを彼女は『さすがは私！ 注目されてる！』と捉えているようだ。

壮年の男が先ほどのフィルズの提案について、考え込むように腕を組んだ。

「大聖女様か……それなら、一国の王だつて頭を下げる相手だ。しかし、そう簡単に繋げるか？」

「今日辺り、王都に入らつて聞いているが……」

「なんでそんなこと知つてんだ？」

「ん？ 俺、公爵領出身だから」

「公爵領……ああ、神殿長様か！ なるほどなあ。それで知つてるのか」

「まあ、そんなとこ」

察してくれて良かった。実際のところは、直接イヤフィスで連絡があつたのだ。そう説明するとどうやつて知り合つたのかと興味を持たれるだろう。何てことはない。冒険者として活動していた

頃に出会い、ビズを相棒にしていることや子どもながらに実力があることを面白がられ、知り合いになつたのだ。

だが、そこは伏せておくに限る。面白がつてというのは、一般人の持つ大聖女のイメージからはかけ離れることになつてしまつただろう。イメージは大事だ。

「しかし、大聖女か……」

「俺はそれが可能なら良いと思うっすよ？」

「謝りもせずに睨んでるしなあ。マジで終わつてる」

三人の試験官達が女を半ば囲んで相談している様は、女のことを知らなければ、誤解を与えそうな状況だ。

そんな中、隠密ウサギから連絡が行つたのだろう。レナから連絡が入つた。留守電に入つたらしいものを、端末をポケットから取り出し、操作して聞く。

『問題児のことは聞いたわー！ 今回一緒に来た聖女の一人に、そういう子の相手が得意なのがいるの！ 寧ろ大好物だつて！ 今から一緒に迎えに行くわー！』

「うげ……レナ姉の行動力を甘く見たな……」

これは隠密ウサギ達も認識を修正すべきだろう。フィルズが早めに留守電をチェックした理由もそこにある。レナはとにかく思い立つたらすぐの人だ。大聖女としてなのか、直感力が高いというのも関係している。

そうこうしている内に、レナが来たようだ。受付に続く廊下から現れたのは、初老の男性。その

後ろにレナと上品な女性が一人。そして、レナの護衛をしている女性——この国の辺境伯の一人娘であるアルシエがいた。

レナが嬉しそうにフィルズに手を振っており、初老の男が話しかけてきた。

「君がフィルかな。うちのギルド職員が迷惑をかけたようで申し訳ない。私がこのギルドの長ながをしているヘルダだ。シエルから聞いた通りの子の子のようだね」

「……神殿長に？」

ここで、思わぬ人の名が出た。シエルとは、この国の教会をまとめる神殿長の名だった。

「シエルとは同期なのだよ。私は元神官だね。聖騎士を経て、冒険者になった変わり者さ」

そう言つて、ヘルダは楽しそうに笑つた。

中々聞かない経歴に、フィルズは感心する。

「変わった経歴だな。けど、そういう生き方は嫌いじゃない」

ヘルダは、くしゃりと表情を崩して笑つた。

「ははっ。ありがとう。まあ、そういう経歴もあつて、彼女を預かることになったのだよ。だが、ここどころ忙しくてね。そのせいで目が届かなくなつてこの様だ。すまない」

「あゝ、その忙しいことの原因に多少関わつてるから、俺は文句言つつもりねえよ」

「ほお……」

原因というのは、闇ギルドの一件だ。貴族の処分が始まり、王都の冒険者が何人か犯罪に手を貸していたことが明らかになった。

これにより、この国の冒険者ギルドをまとめる立場であるヘルダの所に報告が集まつていたのだ。冒険者の処分には冒険者ギルドの了承も要するため、その対応に追われているのだろう。

これを知つているということから、ヘルダのフィルズを見る目に少し力が入つた。興味を持ったようだ。

「うむ……なるほど。ああ、すまない。昇級試験を受けに来たのだつたな。コレのことは……」

「うふふ。ヘルダ様？ 当然、わたくしにお任せくださるのでしょうか？ 違いました？」

「っ……あ、ああ……」

声を掛けてきたのは、レナの後ろにいた女性。服装からしても、恐らく聖女で間違いないだろう。ただの上品なだけの女性ではなさそうだ。可愛らしい声に似合わない押し強さを感じた。ヘルダもタジタジになっている。

「ありがとうございます。では……」

「っ、な、何よ……っ」

問題の令嬢は、聖女が自分より若いと見て、少し強く出ようとしているのが感じられた。

「あら、わたくししたら、ご挨拶あいさつがまだでしたわね？ 当代の聖女、第二席のラナラマと申します。はい！ 言つてみてくださいませまし！」

「えっ、ら、ららマラ？」

「違いますわ！ ラナラマです！」

令嬢に一步近づくと聖女ラナラマ。

「らっ、ラララマっ」

「ラが多いですわ！ さあ、もう一度！」

今度は大きく一歩だ。ラナラマは距離を詰めてくる。その間、絶対に目を逸らさない。それどころか瞬きもしていない。

「らっ、い、いやよ！ なんてこんなことー！」

怖くなって半歩下がる女性。しかし、ラナラマの一步は大きい。

「ふふふっ。こんなことではありませんわ！ 挨拶ははつきり、言葉は一つ一つはつきり口にしますのよ！ 口をしっかりと動かして！ ラナラマサマまできちんと言いましょう！」

「あああああつ、もう!! しつこい！ くうっつ！ ラナ、ラマ、サマ!!」

圧力に耐えられなかったらしい。目の前、拳一個分まで迫られた女性は、上を向いて叫ぶように言った。すると小さく半歩分、身を引くラナラマ。

「よくできましたわね。さあ、わたくしのことは、これからずっと、そう呼ぶのですわ。間違っても、ねえ！ とか、あの、とか言って呼び止めないように。常にラナラマサマですわよ！」

「わ、分かっ……分かりました！」

恐らく、彼女にとって、ラナラマは初めて出会った人種なのだろう。彼女のようなあまり他人に好まれない性格の者に対して、ここまで構おうとする者はいなかった。よって、どう対応して良いか分からない内に色々決められていく。

「よろしい！ では行きましょう。着替えは教会で用意しますわ。あなたは今日、この時から、わ

たくしの娘ですわ！」

「娘!? あんた、いくつつつ、ら、ラナラマサマはいくつでしようか……っ」

またラナラマの顔が近付いてきたため、令嬢は呼び方を修正した。

「女性の年齢は同性であっても、あまり聞くものではありませんわよ。ですが、お教えしましょう。神に仕えることを誓ったわたくしは、その御心によって長く生かされていますわ。今年で六十ですわよ」

「……は？」

「六十ですわ。幾つに見えまして？」

「……お、同じくらい……」

「まあっ、随分と若くしてくださいましたのね？ 神官は、年齢不詳かほとんどですから、まず相手が年上だと思って対応すべきですよ。因みに、そのヘルダ様はわたくしよりもずっと年上ですわ」

「え……」

「ああ……そのせいで、甘くなり過ぎたかもなあ」

ヘルダにとつてみれば、孫か曾孫くらいの子どもに感じていたのだろう。そんな子が、頑張っって反抗している様に見えなかったのかもしれない。

「副ギルド長が代わりにキレてたっすよ」

心が広過ぎて、下が怒っていたようだ。もう少しキツク言ってくれと思うことはあるだろう。